

### 最後の日光勤番士寄進の石灯籠

慶応四年（一八六八）四月、戊辰戦争のさなか、東征軍の板垣退助は、日光山内に立て籠もった旧幕府脱走軍の追討に向かった。僧侶たちの説得もあり、脱走軍は日光から引揚げ、日光は戦火に会うことなく新政府に接収された。代々日光勤番（日光東照宮の火の番）を勤めていた八王子千人隊も任を解かれて帰郷した。しかし、最後の日光勤番士らを率いていた千人頭の石坂弥次右衛門よしかたは、八王子に戻った閏四月十日の夜、日光を明け渡したことを詫げるかのように切腹して果てた。

八王子市千人町の興岳寺にある石坂弥次右衛門の墓には、最後の日光勤番士四六名が、その年の十月に寄進した石灯籠二基が残されている（一名は後に削除）。向かって左側の石灯籠の台座には、日野市域出身の同心で、最後の日光勤番に赴いた井上松五郎（日野宿北原）、土方勇太郎（新井村）、山口和吉（豊田村）の名も刻まれている。この時すでに彼らの多くが徳川家を離れ新政府にも仕えず、村で一農民として生きていくことを選んでいった。徳川家に殉じるような御頭の死への哀惜と追慕が感じられる石灯籠である。

（郷土資料館 矢口祥有里）

これは「広報ひの」平成24年5月15日号に掲載された記事の詳細版です。資料館にて印刷したものも配布しています。

（問）郷土資料館（TEL 592-0981）

